

子どもにとっての物の意味 I ー意味の現れ方とその要因ー

○吉川 真利子 四宮 卓子 常川 允子 中田 良子 長谷川 総一郎 横山 洋子 杉谷 利枝子 横山 文樹
(富山大学教育学部附属幼稚園) (富山女子短期大学) (昭和女子大学)

1 問題と方法

人間にとって生きるということは、様々な事物や出来事と自分との間に関連をつけることであり、それらの物に＜意味＞を見出すことである。それゆえ、物はただ単にあるというだけでは人間に対して何の影響も与えない。それは＜意味＞を見出す人間がそれを＜意味＞あるものとしてとらえたときに初めて存在してくるのである。人が物を知覚するということは、その物に何らかの＜意味＞を見出すということである。＜意味＞を見出すからこそ、その存在に気付くこともできるのである。

本研究では、物の＜意味＞は誰でも共通であるということとはありえないという前提に立って、様々な保育場面の中から子どもが物にかかわっている場面を取り上げ、物が子ども一人一人にどのように受け止められているのか、子ども一人一人にとって物がどういう＜意味＞をもっているのかについて考えることによって子どもにとっての物の＜意味＞の現れ方とその要因を明らかにする。

2 物の＜意味＞の現れ方

(1) 子ども一人一人にとっての＜意味＞の相違

【場面1】鉄棒をセーラームーンの家にしたY子

Y子とR子は鉄棒にぶらさがりながら遊んでいる。そこへS男が来て「鉄棒させて」と言うが、Y子は「ここはセーラームーンじゃないと入っちゃだめ」と答える。

◆ 鉄棒をセーラームーンの家に見立てて、ぶらさがったり、ポーズをきめたりして遊んでいるY子らにとって鉄棒は自分たちの世界を作りあげるために必要な物としての＜意味＞をもっている。しかし、鉄棒をよじ登ったり、回ったりしてその機能を楽しむためのものとしてとらえたS男とでは、＜意味＞のとらえ方が異なっている。そのために同じ鉄棒で一緒に遊ぶことができないのである。

このように、物は一人一人にとって固有の＜意味＞をもっている。

(2) 子どもと保育者との＜意味＞の相違

【場面2】ナイフを洗って片付けたT男

粘土コーナーの片付けの時、保育者は「ナイフ片付ける場所知ってる」と尋ねた。T男は「うん」と言ってままごとキッチンの蛇口を開いてナイフを洗う真似をした。そして、ナイフをそろえて片付けた。

◆ 保育者にとって、T男が使っていたナイフは、片付けになると遊びが終わって用済みになった「片付けなければならない物」として＜意味＞を変えてしまう。しかし、T男にとってナイフやままごとキッチンは、今まで通り自分の「遊び相手」のおもちゃであり、ままごとという遊びの世界の中で作りあげた＜意味＞をもち続けている。

このように、子どもが感じている物の＜意味＞と、保育者が思っている物の＜意味＞との食違いが起きることがある。

(3) 物の＜意味＞の変容

【場面3】鉄棒に挑戦するA子

鉄棒にとびつき体支持したA子は上体を倒す。補助しようとした保育者にA子は「さわらないで」と言う。ゆっくり手を離したA子は「先生見て」と叫ぶ。

◆ A子にとって鉄棒はぶらさがったり、回ったりする物としてとらえられている。鉄棒の＜意味＞は、機能の面では変化していない。心理的な面では、鉄棒に初めて挑戦した頃には、彼女にとって「怖いもの」でしかなかった。技ができるようになると鉄棒は自分の手の届く「楽しいもの」へと変化した。その後、何度もぶらさがるようになると鉄棒は「挑戦意欲をかきたてるもの」へと＜意味＞を変えた。鉄棒は、保育者に見てもらうことで「喜びへ導くもの」となった。

このように、物の＜意味＞は一定不変ではなく、子どもの経験の過程で変容していく。

(4) 個々の＜意味＞をつなぐ包括的な＜意味＞

【場面4】家に必要なものを作るS子

作りかけの木造の家に保育者がゴザを敷くとS子らは、カラービニールでカーテンを作り、段ボールでトイレなどを作った。それを見てY男らが加わり雨よけの屋根などを作り始めた。

◆ 保育者が敷いたゴザが刺激となり、S子らは、家のカーテンを作り始め、男の子たちは屋根などを作り

始めた。思い思いに個々の遊びをしているように見えるが、作っている物の＜意味＞は「家」という＜意味＞でまとめられ関連づけられている。

3 物の＜意味＞の現れ方の要因

(1) 人間関係

【場面5】年長児E子の心を感じた年少児M子

年長児は、入園してきた年少児にパクパク人形をプレゼントしている。M子は、遅れて入ってきたE子と向き合はずかしそうにしている。E子がパクパク人形を動かして、「こんにちは、よろしくね」と声をかけると、M子は、笑顔になって「もっと動かしてみて」と言った。

◆ 年長児が作ったパクパク人形を動かしながら年少児のM子に声をかけたことで、緊張して待っていたM子の心を解きほぐし、二人の心を寄り添わせる働きをした。二人の間に存在する物が、互いの優しい心を伝え、あたたかい人間関係を発生させる。物が単独に存在してもこのような関係が発生することはない。

その物を扱う子どもがどんな気持ちで扱っているか相手に対してどう接しようとしているかによって、物の＜意味＞は決まってくる。

(2) 時間意識

【場面6】こいのぼりを家で作ってくることにしたH男

H男は、「子どもの日お祝い会」に使う段ボールのこいのぼりトンネルを補強する木の枠にL字金具を止めている。枠を3つ作ると時間がきてしまった。トンネルを作る日が2日しかないことがわかったと段ボールに貼るこいのぼりを連休中に家で作ってくることを思い付き、色画用紙をカバンの中に入れた。

◆ H男が段ボールで作っているこいのぼりのトンネルは、未来にこれをたくさん並べて迷路になるという予測をもって作られていた。つまり、未来における迷路の一部であるという＜意味＞をもっていた。しかし過去の経験から考えて、予定の日までにできそうにないという予測が生じたため、段ボールにはるこいのぼりは、色画用紙で作ってきて、貼りつけるという方法を考えた。色画用紙もまた、こいのぼりトンネルを作るための重要な＜意味＞をもつ物になった。

このように子どもは、過去、現在、未来という時間意識の中で生き、物の＜意味＞にも影響を受けている。

(3) 目的意識

【場面7】物の質感を考えて素材を選んだK男

K男は、指人形劇「かちかち山」の準備をしている。牛乳パックと折紙で舟を作る。「牛乳パックは木の舟。丈夫だから沈まないよ」「折紙は泥の舟。ぐにゃぐにゃになってすぐ沈んじゃうよ」と話す。

◆ K男は、「かちかち山」の人形劇で使う木の舟と泥の舟のイメージにぴったりの材料を自分の経験のもとに考え、木の舟は丈夫な牛乳パックを、泥の舟はもろい折紙を選んだ。牛乳パックと折紙は、かちかち山の舟の材料として特別の＜意味＞をもった。

このように、子どもが目的をもって遊びを進めていくとき、その目的を達成するために必要な物が明確になり、大切な＜意味＞をもつことがある。

(4) 気分のあり方

【場面8】積木の遊びを中断したN男

積木で自動車を作ったN男は、そこへ友達が別のイメージで黙って入ってきたのが受け入れられず、激しいトラブルになる。N男は、その後しばらく積木の横で不機嫌な顔でじっとしていた。

◆ N男にとって積木は自動車に見立てられ、楽しい遊びの対象としての＜意味＞をもっていた。しかし、友達とのトラブルの後では、同じ積木もその＜意味＞を失い、自分とは無関係な物となってしまった。

このことは、楽しい気分の時と、悲しい気分の時では、同じ物でも同じように見えないことを表わしている。その時の気分のあり方で、物の＜意味＞が変わってしまうのである。

(5) 興味・関心

【場面9】積木の片付けを遊びにしたR男

積木を使って基地を作っていたR男は、片付けが始まっても、自分の遊びに熱中していた。ところが友達が長い積木をもって「これ、どこに置けばいいの」と尋ねているのを聞いて「ぼくがやってやる」と積木を移動して長い積木を片付けた。それをきっかけに、自分が使っていた積木を片付け始めた。

◆ 積木で基地を作っていたR男は、片付けが始まっても自分の遊びに熱中していた。ところが、友達が積木の置場に困っているのを見た時、積木を組み合わせるという自分の興味・関心と結びつき、積木の片付けがこれまでの経験を生かした楽しい遊びに変化した。

子どもがある物に関心をもつと、その物に積極的にかかわろうとし、生活に取り入れながら、新しくその物の＜意味＞を見出していく。